

たったです。 たまには、年下の子供たちを集めて、作り話を聞かせてました。即興の作りばなしですよ。その頃から、自分の気持ちる表現する楽しさみたいなものを感じていていたみたいですね。

## 湯 ぎ

父親は僕が五歳の時、戦死してましたね、家は貧しかったです。跡継ぎなんて考えられませんでした、高校の授業料を出してもらうなんてことも、不可能だと分ってましたからね、中学に入った時分には、俺は他所に出て働くんだと心に決めてました。それで中学をでるとすぐ熊本に働きに出て、済々黉の夜間部に学んだんです。

四年間、いろんな仕事をやりました。下通りの材木屋、黒髪のカマボコ屋、それに、ちっちゃな印刷屋とかね。二十八年の大水害の時には材木屋で働いて、盛んにリヤカーを引いてました。大甲橋、熊本城の坂には泣かされましたよ。決して上を向いては引かないんです。歯を食いしばって下を向いて、うんうんいって引くんです。もう登り切っただろうと顔を上げると、まだなんですね。その時のつらいことね。(笑)

済々黉夜間部の演劇クラブは、三年の時、僕が作ったんです。その年に、木下順二の「夕鶴」をやりましたよ。これが

僕の初めての舞台なんです。

熊本にかかる舞台は大体見てましたね、好きだったんです。それでも、役者になるんだというふうには意識してなかったですよ。当時、僕のまわりには絵を描いている連中がいました、済々黉の同級生で、今、フランスに住んでいる森山繁君とか、大津高校にいた島田興司さんとかね。彼らは、銀丁なんかでよくグループ展を開いてました。その頃の僕は彼らと交わることに飢えていました。彼らと交わることで心の渴きをいやしてましたし、自らの刺激にもしてたみたいですよ。

そこで、済々黉を卒業すると、すぐさま、演出でも、照明、装置でもなんでもいい、演劇の仕事に携わりたいたいというこ

## しょうね 性根

民芸の試験を受けたんですが、これが五次試験まであって、一週間置きぐらいに合格発表があるんですよ。一緒に住んでいた森山と二人、とおった、とおったと手を叩いているうちに五回目の最終試験に合格しました。

昼間養成所に通い、夜働くんなんです。僕だけでしたね、僕きながら学んでいるのは。一度は過労でブツ倒れたんですよ。仕事の中で一番条件がよかったのがサンドイッチマンです。夕方四時から晩の

九時頃まで、一時間百円で、ピンハネされて四百円になるんです。その頃、新宿のドヤ街で天井が三十五円で食べられてましたから、生活はなんとかやれました。

後楽園の競輪場で警備の仕事もやりました。

この頃になっても、役者になろうとは考えてなかったです。養成所は、一年間、演出、役者志望とも同一講義なんです。一緒に勉強している役者志望の仲間が総じて性根がないんですね、ひ弱なんです。舞台の仕事なら何んでもと考えていたんですが、そんなら、ひとつ俺が役者になるかあ、そんな調子でしたよ。

二年生の頃です。当時NHKテレビで「パス通り裏」というのをやってまして、民芸を通して地方の夜間学生という設定で、四、五人の青年を探してたんです。どういうわけか、僕も入ってるんですね。そのうち僕一人になり、あとでは、なんとか先生の家に出入りする学生になれということ、えらく出れるようになりました。

テレビに入れば名前が売れるんです、その時には、そんなふうには考えなかったですよ。それというの、拘束時間が長いわりには、出演料は三日で八百円なんです。こっちはバイトでやっとな生活してらるわけでしょう。バイトやっていた方が生活は安定してるんですよ。(笑)

ね。

## 虚像と実像

自分ではどこが違っているかよく分りませんが、でも、あいつは変わるといって受け止め方が一般的なようですね。やはり考えますよ。役者の仕事というか、芸事に携わる人間は、あまり地というか、実像を見せない方がいいみたいですね。虚像として存在しての方がいいわけですよ。でもね。僕にしても、ひょうきん者とか間抜け者とかいうイメージで押し出されているというか、求められている虚像の範囲を、今少し広げたい、別の虚像を作ってみたいと思いますよ。しかしねえ、人が僕に見たキャラクターというもの、自分ではそうは思わなくても、案外、本物かも知れませんよ。(笑) いずれにしても、人が選んでくれたキャストインクに対しては、それを精一杯發揮できる素材になろうと頑張りますよ。何人も大勢いる中から、トボケ役は常田だと言ってくるんですからね。(笑)

僕は最近になって痛切に感じるんです、役者とか、その他表現の仕事というのは、ものすごくせいたく仕事として世の中に存在していると思うんです。なければないでいいようなものですが、例えば、踊りとか歌のない世界を考えてみて下さい、人間の生活なんて、およそ無味乾燥なものになってしまふんじゃない

ですか。

今の社会は経済的にも、人間の生活環境の面でも、いきづまりにきており、いろんな問題が出てきてますよね。こんな時代だからこそ、僕らは、皆さんに優雅なせいたくといったものを精一杯味わってもらえよう存在になりたいと思えますね。

僕のところ、熊本の若い人から、役者になりたいがということ、僕が歩んできた同じ道でもあるわけですから、ついつい長文の返事を書いてしまいます。ずっと以前の本誌で、俳優の笠智衆さんが登場されましたね。その中で、今の若い人のことを「新しい人達は新しい人なりがいい、いじけていない、伸び伸びしてるし、非常に大胆だ。このまま伸びていって欲しい」と話しておられますね。すばらしい抱擁力というか、さすがという感じがしますね。そういうふう若い人たちを見てやるのが大事なんです

## 保谷市長選

東京・保谷市長選出馬の動機は、地方自治というものは、そこに住む人達が、その風土とか環境といったものに対して積極的に考えていくという姿勢を持て

ば、もっと変わるもんだと考えてました。大きな時代の流れの中で、苦しまぎれに、国全体が開発という方向に流されている部分も判りますけど、こらあたりで、精神的なことも含めて、開発とか建設とかいう錯覚を考え直してみる勇気が必要ではないか、一年ぐらいは計画を全部ストップして、九万人が、いまなら、まだある空間を共有できる青写真を作ろうではないか、そのためには、何をガマシ、何を急がねばならないかを真剣に考えようと呼びかけたんです。非常に抽象的なスローガンで分りにくかったよう

です。僕が選挙に出るについては、一部でいぶん茶化されましたね。それでも、報道機関は茶化しませんでしたよ。当初、二千票だろうとの予想が結局四千五百ですからね。当選者が一万票チョットでしょう。大変な数の人に支持してもらったわけですよ。選挙が終れば、ハイそれまでよというわけにはいきませんしね。票の重みが生活の中まで入り込んできていますよ。四年後どうするんだと、よく人に聞かれます。まだ時間もあることだし、出ることも出ないとも言えません。

今回は、菊池郡の合志町でロケに入ったんですが、三世代家族の嫁としゅうとめの問題を軸に、祖父母の存在価値とか教育とかを考えさせる「おばあちゃん

帰ってきた」という映画の仕事で帰ってきたんです。監督が中山節夫さんという合志町出身の人で、この人ともよく話すんですが、地域性というものは、特殊で、そこだけあるものじゃなく、日本国中、早くいえば世界中に普遍的な問題としてあるんじゃないか。だから、そこから出た人が、その地域の問題をテーマに、きちんとした作品を作れば、それは、ものすごく典型的なものになるし、他の地域の人たちにも、共通の課題として絶対に映る筈だと話してらるんです。

今度、熊本のテレビで芸術祭に出すドキュメンタリーをとるんです。いま、そのための準備もしてるんですが、これはメガネ橋を作った石工の話です。メガネ橋というのは歴史的にも価値のあるものですし、作業としても、大変なスケールのものですよね。そんなことの価値を現代の人間に問うてみようというわけですよ。六月には撮り終わりますが、僕はこの中でナレーターとリポーターを兼ねています。絶対芸術祭をとるんだと、僕はいます、燃えてるんですよ。

## 路 地 裏

趣味は大工仕事ですかね。今、甲府の山に僕が設計した丸太小屋を建ててるんです。手なんか見て下さい、豆だらけで

すよ。壁は土で塗り、囲炉裏で薪を焚くんです。その方が虫よけにもなって建材にもいいんですよ。

酒は付き合ひ酒でも最後までいる方です。焼酎が一番合ってるみたいですよ。友達が気をきかせるもんですから、球磨焼酎は欠かしません。

今、家内と高校生の双子と四人家族ですが、家内は同郷でした。僕が養成所にいる頃一緒にいました。男の子は音楽、女の子は美術関係の仕事についてます。昼間はそれぞれ自分のやりたいことをやって、夜間部に学んでらるんです。男の子は将来板前になりたいらしくてね、この間相談したもんですからね。いいぞやれっていつてるんです。

熊本の風土は僕の身体にしみついています。空気の肌ざわり、眼に映るもの全てに熊本を感じますよ。甲府の山は、全然違うんです。風土的に貧しいんです。バサバサして潤いがないんです。自然が人間を殺気立てていますよ。

熊本は、いつまでも、緑の美しい郷土であってほしいですね。それから、路地裏のきれいな街、路地裏を歩いてみたいというふうな街づくりをやりたいですね。みんな表通りの街というのは潤いがありませんよ。表通りと裏通りの関係のきちっとした街、そんな街になれ